

talk! talk! talk! 俳優・阿南健治さん



俳優

阿南健治さん

三谷幸喜氏主宰の劇団「東京サンシャインボーイズ」の所属俳優として活躍し、現在、舞台を始めテレビ、映画へと活動の幅を広げる阿南健治さん。一癖も二癖もある個性的な役から「こういう人いる!」と思わせるような親しみ深い役まで、ありとあらゆる役柄を巧みに演じ分けながら、見る人に感動や笑いを届けている。俳優という仕事を含め、表現することが好きだという阿南さん。その表現道具のひとつがカメラである。今回は、撮ることはもちろん撮られることも好きだという阿南さんとカメラとの関係を、ユーモアたっぷりに語っていただいた。

プロフィール

あなん・けんじ。1962年、大分県生まれ。生まれてすぐ兵庫県に移り住む。高校卒業後上京し、映画の専門学校に入学、同時に俳優養成所に所属する。そこで俳優への道を決意し、渡辺音楽学院(スクールメイツ養成所)演技科、アメリカウイスコンシン州での牧場生活、ニューヨークのアルピンエイリーダンススクールを経て、1984年帰国後すぐ大衆演劇笑々座に入団。蛭川幸雄氏の舞台出演をきっかけに1986年、蛭川幸雄スタジオ入所。その後三谷幸喜氏と出会い、1989年東京サンシャインボーイズに所属する。解散までの5年間に「12人の優しい日本人」、「ラチオの時間」、「ショウ・マスト・ゴー・オン」など多くの舞台に出演する。その後、現在に至るまでテレビ、映画、舞台とジャンルにこだわらず、数多くの様々な役をこなしている。主な舞台作品にNODA.MAP 原作「罪と罰」(野田秀樹作・演出)、「彦馬がゆく」(三谷幸喜作・演出)「太鼓たたいて笛ふいて」(こまつ座)など。ドラマ作品に「新選組!」(NHK)、「マザー&ラヴァー」(関西テレビ系)、「ごくせん」(日本テレビ系)「愛と友情のプグウギ」(NHK)などがある。夏には3人舞台「タモイ〜収容所(ラーゲリ)から来た遺書〜」(作・演出、ふたくちつよし/出演、平田満、阿南健治、新納敏正)に出演する。第11回講談社ノンフィクション賞を受賞した辺見じゅん著「収容所(ラーゲリ)から来た遺書」を基に書かれた作品で、第2次大戦後シベリアに抑留された男を演じる。7月22日〜8月15日まで、カメラリホール、四谷区民ホール、吉祥寺シアターにて上演する。

写真になって出来る喜び それが写真を好きになった原点

写真を撮り始めたのはいつ頃からですか？

写真歴は厳密にいうと長いんですよ。1番最初に触れたのは、小学生の低学年の頃じゃないかな。駄菓子屋で売っているような、ただシャッターボタンがついているだけっていうおもちゃみたいなカメラがたまたま家にあったんです。これで本当に写せるのか？ というようなもので、でもちゃんと専用のフィルムが売っていたりして、それで撮ったのが最初ですね。

ちゃんと写りましたか？

子供がおもちゃのカメラを持って現像しに行きますから、カメラ屋のおじさんは「うちでできるかなあ。一応やってみるけど」という反応ですね。でも画質は粗いし薄暗いんですけどちゃんと写っていましたよ。予想通りのものなんて絶対に撮れないカメラですけど、意図は違ってよね、写真が撮れたということがうれしかったですね。

高学年になってからは、お小遣いを1年くらいためて安いカメラを買ったりしましたね。写真が撮りたい！カメラが欲しい！っていう思いはその頃強かったんでしょうね。

どんなものを撮っていたのですか？

子供にとってはフィルム代も現像代も相当かかりますからね、そう頻繁には撮れないですよ。だから遠足があったらもっていったり、路面電車がなくなるってイベントがあったら撮りにいったり、何か特別なことがあると活躍していましたね。

でも当時の写真を見てみると、普通の日になんでもない写真を撮っていたりもしていたみたいですね。多分暇なときに何か遊ぶものを探していて、フィルムが余っていたからちょっと撮ってみたりはしていたんでしょうね。そういえば夕焼けはよく撮っていましたね。今でも美しい夕焼けを見るときつい反応してしまいます。

カメラへの興味はその頃から現在まで続いているのですね。

そうですね。それからカメラに凄くのめり込んでいったということでもないんですけどね。カメラを何台も買うということもありませんでしたし。ただ、写真を撮るといことは変わらずずっと好きです。

いったい何がきっかけで写真を撮ってみようと思ったのか自分でもはっきりわからないんですよ。ただ、そのおもちゃのカメラを現像に出したとき、それが写真になって出来るようになってくるとい喜び、面白さを感じたのは確かですから、写真への思いはそこから始まっているんでしょうね。



土門拳氏に対抗心!? 「いい写真を見ると悔しくなるんです」

普段はどのようなものを撮っているのですか？

いつもは.....何を撮っていたんでしょう。実は、今回のために何か撮ってみようと思ってカメラを持ち歩いてみたんです。でもいざ撮ろうと思っても、何を撮っていたのか、何を撮っていたのか、考え出すとなかなか撮れないんですよ。ただカメラを持って街を歩いて手当たりしだい撮ればいかとも思ったんですけど、そうはいかないんですね。面白いものを撮りたいのか、美しいものを撮りたいのか、日常なのか、何かしらテーマみたいなものがなくてダメなんです。ただ撮るといのは難しいことです。

いつもテーマを持って撮っているのですか？

そんな大袈裟なものではないですよ。ただ、闇雲に撮るといよりは、何か撮る目的があったり、これを撮ったらこうなるかなと出来上がりをイメージして撮ったりはしていますね。

この景色をこう切り取ってみようとか。

そうですね。でも風景写真は難しいですね。思った通りのものにならないんです。少し前に満開の桜を撮ろうと思って行ったんですが、目で見て想像したものや実際に写真になったものの印象がかけ離れていたんです。全体を撮っても、どうしても豪華さが伝わらないというか。そうすると、逃げではないんですがどうしても寄りで撮ってしまうんですね。だからあまり風景写真は撮ら

ないんです。

見たままの迫力が写真では伝わりにくいのでしょうか。

以前松本に行ったとき、この雄大なアルプスの景色を写真に残さなければと思ってカメラを向けたんです。でもファインダーを覗いてみると途端にその気持ちが薄れてしまうんです。たとえばある山を写そうと思ったとき、周りの雄大な山並があつてこの山があつて、それが素晴らしいと思ってカメラを向けるのに、ファインダーではその山だけになってしまうんです。当たり前なことなんですけどね。でも「あ、これは撮ってもつまらない」と思っちゃうんですよ。そうするとシャッターが切れないんです。だから僕の中では「風景は写真にするとつまらなくなってしまう」というものなんです。でもそれも、プロの方のような腕や技術があれば意図するように撮れるんでしょうね。風景を撮った写真集を見るといいなと思うことはよくあるんですよ。でも自分で撮ってみても同じように撮れないですから。

そのためにちょっと腕を磨いてみようかな、という方向には行かなかったのですか？

いやあ、できたらいいなとは思いますが、無理だなと思いましたよ。たとえば土門拳（※注）さんの写真なんか見ているとね、鉄道の写真だったり建物の写真だったり、どれをとっても素晴らしいんですよ。空気感、迫力、あれは僕には出せないですからね。それが悔しいというか.....いや、なんで僕が土門拳さんと対抗できるんだっていう、悔しいと言う時点で間違っているんですけどね（笑）。そこで比べられる次元じゃないだろって怒られちゃいそうですけど、でも見ているとなんだか悔しくて、自分でも撮りたいと思っちゃうんですよ。

こんな写真が撮れたらと思う気持ちはわかります（笑）。

そうですね、写真集を見ると「いいな」と思っちゃうんですよ。僕は同時にすぐ「撮りたい！」と思っちゃうので撮るんですが、やっぱり全然撮れない。当たり前ですよ（笑）。以前に土門拳さんのドキュメンタリーを見たんですよ。仏像を撮っていたんですが、シャッターを押すまでにじっと何か待っているんです。その時間というか流れる空気が恐ろしいですよ。仏像ですよ？「いつ撮っても同じじゃん！」と言いたくなりますよ（笑）。でも土門さんには同じではなくて、「ここだ！」という時があるんですよ。そういう、写真がとらえる一瞬の空気感、美しさというものがあつたろうというのは僕なりにも分かるんですが、同じようにやるのはね.....（笑） できないですよ。ただ憧れはあるので、いつの日か撮ってみたいと思いますけどね。

同じようには撮れないから同じような被写体で写真は撮らない、と。

そうなるんですよ。悔しくなるから撮らない。もう少し上手に撮れるようになったら面白さが分かるのかもしれないんですが、今は、今の僕でも面白く思えるようなものを撮りたいんです。

※注 土門拳＝世界的に知られる写真界の巨匠。リアリズム写真を確立させ、写真文化の流れを作ったと言っても過言ではない。その土門氏の輝かしい業績をたたえて制定された「土門拳賞」の受賞作品展を、銀座、大阪二コンサロンで開催中。



西新宿のビル群の中で咲く桜を撮影



「引きよりも、どうしてもアップになってしまう」と阿南さん

カメラ片手に百面相 自分で自分を撮るのが好き

写真にして面白いというのはどんなものですか？

見たままというのではなく構図を工夫してみたり、何か物を置いてみたり小細工してみたり.....あとは動くものですね。人物はそのまま撮っても動きがあつて面白いんです。

この間甥っ子と姪っ子が2人で並んで歩いていて、それを後ろから撮ったんです。そのときは面白くて何枚もバシバシ、バシバシ撮ってしまいましたね。それで、その中に1枚でも構図とか光の加減がいい感じの写真があつたりすると、「お、いいんじゃないの」ってなる。それがまた面白いんですよ。それから、自分もよく撮りますよ。

自分で自分を撮るといことですか？

そうですね。自分を撮ると楽しいんですよ。別に僕はナルシストではないですよ。自分をかっこいいとも思っていないし、被写体としてはナンだなと思っていますから。あ、いえ、ないことはないですよ。なければこの仕事やってないですから、自分ではアリだと思つてはいるんですけど。って、どっちなんだよって感じですね（笑）！

とにかく撮るのも好きなんです、仕事柄撮られることも好きなんです。自分だったらいつでもすぐ撮ることが出来ますからね。

それは、たとえばご自宅で部屋の中で撮ったりしているのですか？

いえ、それはさすがにできないです（笑）！自分撮りの写真は自分のサイトに載せるために撮っているんです。そういう理由づけがないとやっぱり恥ずかしくて撮れないですよ。たとえば新しい役の撮影があつたらその衣装を着て撮ったりするんです。その役に合った顔を作ったりして、「この顔か？こうかな？こうかな？」ってやっているうちにかなりの枚数を撮ってしまっていたりします。



2人が移動していく姿を後ろから追いかけて何枚か撮ったうちの1枚



NHKドラマ「愛と友情のプギウギ」での衣装を着て自分撮り。部長の腰巾着役ということで、役をイメージしながらいる顔をされています

人に撮ってもらうのではなく、なぜ自分で自分を？

それもそれで恥ずかしいじゃないですか。いろいろな顔をする僕を撮ってくださいって言ってカメラを渡すのも微妙ですよ（笑）。だからいつもひとり、誰も見ていない所で撮ります。人から見たらかなり寂しい、というか怪しいでしょうね。僕自身は自分を撮って、見て、あれこれやっているときはとても楽しいんですけどね。ただ、自分撮りはシャッターを押す側の腕が入ってしまったり、セルフタイマーだと自分が中心に入らなかつたりしている制限が出てくるんです。だから写ることに関しては、やはりカメラマンさんなどに自由に僕を撮ってもらう方がより楽しいのかなとは思っています。

写ることが好きというのはこの仕事を始めてからですか？それともともと好きだったのですか？

どうだったかな。だからこの仕事を選んだということではないんですが、もともとそういう傾向があったのかもしれないですね。たとえば何気ない風景でも、絵になる景色というものがあると思うんです。それを自分で撮ることはできないんですが、その中に、自分も絵になる景色の一部として存在したいという気持ちはあるんです。かっこよく言うと、「絵になる人間になりたい」というかね（笑）。それが憧れと言いますが、自分が目指しているところなんです。だから、自分を撮るのが楽しいというのは、もしかしら絵になる自分というのはどんな感じなのかなと試行錯誤しているのが楽しいということかもしれません。

役者も写真も正解のない世界 その自由さが魅力

ですから、また名前を出して恐縮ですが、土門拳さんの写真は撮りたいという意味でも憧れですが、でも「自分もこの写真の中にいたいな」「土門さんに撮ってもらいたいな」という気持ちにもなったりするんですよ。

なるほど。撮りたい、撮られたい、両方で憧れるんですね。

そうですね。憧れるし、やっぱり撮ってもらえなかったことが悔しい（笑）。特に知り合いだったとかそういう機会があったとかではないのに「なんで悔しくなるんだ」って思いますよね？でも僕、常にそんなんですよ。ジャンルに関わらずいいものを見ると悔しくなる。自分が出来る、出来ないに関わらず「僕もやりたい、悔しい」という思いになるんです。だから本当は、あまり他の人の作品は見ないんです。写真もドラマも、舞台もあまり見ません。

そうなんですか？ドラマも、舞台も？

つまらない作品は見ててもつまらないので見ないですよ。いい作品だと「なんでこれに出てないんだろう」って悔しくなるので見ない。だから結局、自分の出ているもの以外はあまり見ないですよ。自分の作品は勉強になるし反省材料にもなりますからね。でも他の作品はね.....本当はそれこそ勉強のために見た方がいいんですけど、見ると悔しくて余計なエネルギーを使ってしまうのでね。こんな人あまりいないですよ？（笑）。

それだけ俳優という仕事が好きなのですね。

まあそれはそうですね。役者は好きです、好きを超えるくらいかもしれません。でもそれは当然なんですよ、好きじゃなければやっていませんから。

どんなところが俳優の魅力なのですか？

うーん、どうなんでしょう？単純に違う人になれるとか、見た方に楽しんでいただけたら感動していただいたり、おこがましいんですが、そう思ってくださいることでうれしくなったりとか、いろいろあるとは思うんですが.....よく聞かれるんですよ、なんで役者をやっているんだって。僕ははっきりしたことは言えないんですけどね、ただ、この仕事は正解がないと思うんです。どう演じれば正解というわけではないですから、その役に対して自分が自由にいろいろな事ができるというのは魅力のひとつですよ。

答えを出して、そこで終わりというものではないのですか。

ええ、たとえそのドラマは終わってもまた別のドラマがありますし、また新しい役もある。正解もないし終わりもない。それが漠然としていて不安な部分でもありますよ。でも逆に言うところ自由ですよ。どんなアプローチをしてもいいという、その自由さが凄くいいんですよ。

そういう意味では写真も正解はないのかもしれませんが。どう撮ればいいというものではない。

きっとそうですね。見る人によっては凄く写真でも興味のない人にはただの紙になってしまったりして。写真も役者も、何かを表現していくというのは曖昧な世界なんですよ。結局は、どう転ぶかわからない、ある意味バクチみたいな世界ですが、でもその先がわからないというのがワクワクするし、凄く楽しいんです。

一貫して表現する世界が好きなのですね。

そう！表現することが好きなんです。絵を書いたり写真を撮ったり陶芸をしたり、役者もしたり。何かモノを作って外に出したいという欲求は異常なほどあるかもしれません。刺激を受けるような写真に出会うと、自分でも刺激を与えられるような写真を撮りたくなるんです。写真に限らずモノ作りも役者も、そんなふうに作品を通して刺激し合えるコミュニケーションが好きなんです。

様々な役に挑戦しながら 常に何か表現していきたい

役をもらったとき、どのように役づくりをされているのですか？

その役をどう演じたいかというのがあるんですが、それよりもまず全体の物語を考えると、その役として、その物語の中でどう存在させるかみたいなことは考えますね。いらぬところで存在してしまうがなくて、なんとか存在させられたらな。

「存在させる」というのはなかなか難しいですね。

難しいですよ。ただ画面にその役の人が映っているというのではなく、役を離れてそこにその人が生きていうか、僕が芝居をしているのではなくてその人物がそこに存在しているんだという感じ.....なかなか大変ですよ。でもそう思わせないとけないですよ。架空の世界だとしても、その中ではちゃんと生きてる人なんですからね。基本はそこなんですけど、あとはそこからできる範囲で、いかに阿南健治風にアレンジ、デフォルメができるかというね、そこが楽しみなんです。僕の場合はそれをちょっとやり過ぎてしまうことが多々あるみたいです（笑）。

阿南さんはこれまで様々な役を演じていらっしゃっていますよね。本当に芸達者と言いますか、どんな役柄でもこなしてしまうという印象があります。

ありがとうございます。僕も何でもできると思っているんですけど、あはは（笑）。でもまだまだ、役は無数にありますからね。「何かこれからやりたい役はありますか？」と聞かれることもよくあるんですが、いつも「全て」と答えるんです。僕は欲張りですから、作家さんが書いた全ての役をやりたいんです。ただ、なぜか知的な役が全然来ないんですよ！だから今はインテリな役とかやってみたくて。自分ではできると思いますが、インテリにも見えると思うんですけど、誰かキャストイングしてください（笑）。

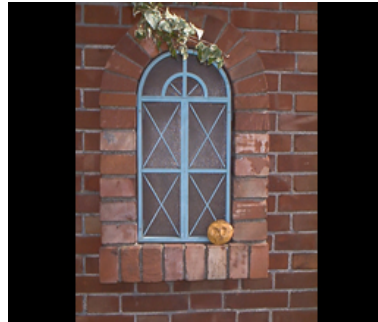
では最後に、今後の目標はありますか？



趣味の陶芸作品を写真に残す。ただ撮るのではつまらないということでブランコに置いて



こちらは滑り台を台座がわりに。「実は花瓶だったのですが、焼き上がったら飾りだったものが蓋になってしまっていて.....オブジェになりました（笑）」



顔のような凹凸がある丸いオブジェは窓際。その焼き色から“せんべい”と呼んでいるそう



阿南さんの次回作の舞台「ダモイ～収容所（ラーゲリ）から来た遺書～」
「シベリア収容所の話なので重くて暗いイメージかもしれませんが、過酷な中で人間が生きる本当の意味を問うという前向きなメッセージを含んだ話です。

とにかくこれからも多くの作品に出ていきたいですね。あとは映画、映画はやっぱりいいですね。テレビドラマもいいんですが、映画にはたくさん出たいです。

テレビと映画では何が違うのですか？

芝居をするという点では一緒なんですけど、映画のスクリーンに自分が写し出されるというのは特別な感じがするんです。映画の映像というのは1枚1枚の絵の連続だと思うんです。さっきも言ったように、いい絵の中に存在したいという気持ちがあるので、だったら映画のあの大きな絵の中で存在できたらいいなと思うんです。

あとはこだわりという点ですね。もちろんテレビドラマにもこだわりはあるんですが、映画を作るというのはそうとうなこだわりの世界ですから、僕もその中に役者として入って一緒にこだわったモノ作りをしたいです。だから目標というのは、いいドラマ、いい映画、いい作品に出会って、いただいた役に常に挑戦し続ける。常に何か表現していきたいということですね。

これから稽古が始まるのですが、とても楽しみです」



[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.